



だつて  
★  
メルは★  
★  
甘すぎる！

恋の雪解け、嵐の訪れ

宮村優

イラスト★柊ましろ

第1章

学園生活は日々順調?

「もうひとついいですか？」

「なんだ？」

「転校生は、可愛い系の女の子ですか？ それとも美人系ですか？」

悠斗の言葉に苦笑する女帝。

「なぜ女子限定なんだ？ まあ、女子なんだが……ヴィジュアルは自分の目で確かめろ」

「そうします！」

元氣いっぱい回答え、悠斗は腰を下ろした。それを見届けた女帝は仕切り直すように咳払いをひとつし、扉の向こうの人物に向かい声をかけた。

「待たせたな転校生、入ってこい」

その言葉を受け勢いよく扉が開く。そしてそいつは姿を現した。

周囲の視線による緊張など微塵も感じさせず、ズカズカと歩みを進め教壇にまで迫り着くと、ふてぶてしい笑みを浮かべ名乗りを上げる。

「如月燐火だ、今日から世話になるぜ！」

たてがみのような髪の毛をかき上げ、牙のような犬歯を覗かせる。

そう、転校生とはかつての敵であり、今や一緒に暮らす同居人、燐火。

家でゴロゴロするのも飽きたから、学校に通うと言いつ出したのが三日前。

あれよあれよという間に手続きは進み本日に至る。

見るからに気が強そうではあるけれど、水準よりはるかに美人である燐火の姿にクラス中の男子が色めき立つ。

ていうか、毎度毎度同じリアクションをする連中である。

そんな男達の淡い期待を根こそぎへし折るように、燐火は声を大にして宣言した。

「先に言っておく、あたしはそこにいる七海駆の女だ！」

だー、いきなりなにを言い出すんだ!?

一斉に突き刺さる視線がいたたまれなさすぎる。オレがいつたいなにをした!?

あまりの衝撃発言に女帝がいることなど忘れ、教室中がざわめく。

その時、オレの斜め後方の席が音を立てる。

反射的に目を向けると、立ち上がった楓がなにか言いたげな顔をしていた。しかし、すぐに周囲の視線に気づいたのか恥ずかしそうに着席する。

「ど、どういことだ！ お前達知り合いなのか!? いや、駆の女だと!」

悠斗のリアクションに大いに満足げな燐火は、猫のような瞳を爛々と輝かせる。  
 「そりやもう深い仲だぜ、おこちやまには刺激が強すぎるくらい濃密な関係だ」  
 「ふ、深い仲って……駆、お前抜けがけしやがったな!? ひとりで大人の階段をのぼったのか? しかもこんな胸の大きな美人と!」

「バカ違う、そんなんじゃないって、燐火の口車に乗せられるんじゃない!」

「あたしと駆は寝起きを共にしてる仲じゃねえか、つれないこと言うなよ」

「寝起きを共にして……テメー、駆、羨ましいぞ、こんちくしょ!」

「お前から少し静かにしろ、さもなくて下顎砕くぞ!」

それまで黙って事の成り行きを見守っていた女帝の一喝。

その言葉は空気を震動させつつ響き渡り、喧騒が嘘のようにシーンと静まりかえる。  
 一瞬にして沈静化した教室を見渡し、女帝の長い溜息が零れる。

で、出てきた言葉が――

「七海! 生まれてから今まで彼氏のいない私に対する当てつけか? 呪ろってやろうか?」

それが生徒に言う言葉か! と心の中で突っ込みを入れたのと同時に、女帝はハッと再び咳払い。そして何事もなかったように言葉を続けた。

「とまあ、今のは冗談だ冗談」

いや、今のは明らかに本気だった。あの殺意は冗談じゃ出せない、こんなに美人なのに今ま



で彼氏がないのもわかる気がする。

「でだ、七海、如月の言っていることはどこまで本当だ？」

女帝の言葉に全員が耳を傾けるのを感じた。みんな興味津々すぎる！

「親戚で、寝起きを共にしてるところは本当です……。転入の資料に書いてありませんでしたか？ 燐火はオレの母さんの妹の娘で従兄妹なんです。それで家で面倒を見ているんです」

もちろん大嘘だ。

母さんがハッキング……。いや、いい感じに処理してくれているので、戸籍上では本当の話であるが。

「そうだったか？ 面倒な資料には目を通さないからよくわからんな」

まったく悪びれることもなく言つてのけてるけど、それつてどう考えてもダメだから！

「それにしても、全然似てねーな」

黙つてる悠斗！ どうして話を広げようとするんだ!?

「父親と似たんだろ……」

とりあえず無難な解答を返してみた。さすがにそれ以上突っ込んでくることもなく、これでようやく話が終わる、そう思った。

が、そんな流れをぶち壊したのは誰であろう燐火だった。

「なんだつていいけどな、あたしが駆に惚れてる事実が変わらんだし！」

ちよ、お前はなにを言い出すんだ！ そんなオレの心の声など届かない。いや、仮に届いても止まらない、それが燐火という人間だ、タチが悪いことに！

燐火の言葉にクラス中の人間が再びどよめく、オレだつて当事者じゃなかったら、きつと面白分に盛り上がるだろう。

だけど残念、オレ思いつきり当事者だからさ……。ただただ心に良くない！

「いいか女共、あたしの駆にちよつかい出すなよ？ それはあたしのだ、爆死する勇氣があるなら話は別だがな！」

衝撃的すぎる転入の挨拶を終えて、如月燐火は二年二組の一員となった。

昼休み、オレは人気の少ない中庭でひとり弁当を広げていた。

今日の教室にオレの心が安まる場所などない。

主にその原因を作ってくれているのは燐火なんだけど。

「こんな所にいたのね」

不意にかけられた言葉に驚いて顔を上げると、ランチバックを手に持った粉雪が立っていた。

「粉雪……。どうして、ここに？」

「どうして？ 昼食をここで考えるのはおかしいことかしら？ 教室はどこかの誰かさんの

おかげで騒々しいし、かなわないわ」

それに関しては苦笑するしかない。

「隣座つても？」

「もちろん、構わないよ」

制服のポケットからハンカチを取り出しベンチに敷く粉雪。

そしてシワにならないよう、スカートを押さえつつ腰を下ろす。

長い黒髪がふわつとなびき、シャンプーのいい香りが鼻孔をくすぐる。

おかしい、まったく同じシャンプーを使っているのに、どうしてこんなにいい香りなんだ？ それにしても、ただ座るといふ動作がこれ程美しい人間がいるものか？

思わず見とれちゃったよ。

粉雪と知り合つて二カ月近く。何週間も一緒に暮らしているのに、その美しさには少しも馴れない。

ただそこにいるだけで華がある、周囲の空気を変えてしまうそんな美人がいようとは。とりあえず、なにか話題でも振つて話をしないと間が持たない！

「ところで、どうして中学に通つてるんだ？」

「あら、もしかして目障りだとも？」

表情から感情を読みにくいせいで、冗談で言つてるのか本気で言つてるのか判断に困る。

「そういうわけじゃないけど、今更中学レベルの勉強なんて必要ないだろ？」

高度な文明を誇るサイエンス星団からやってきた超天才が学ぶことなんて、中学に……いや、この星にあるとはとても思えない。

最初は、オレに近づくためつていう目的があつたみたいだけど、今となつては意味なんかないんじゃないか？

「別に勉強をするだけが学校ではないでしょう」

確かにそうだけど、人と関わり合いを持つとしない粉雪が言うのと、じゃあなんで来てるんだよとも思う。きつと色々あるんだろうけど。

「それでどうしたの浮かない顔をして？ 昨日今日からというわけでもないし、フォスが原因ではないのでしょうか？ まさか楓と別れたことで、己の至らなさを思い知らされてしまったのかしら？」

絶句した。実はここ数日、そのことでオレは頭を悩ませていた。

楓に対してなんの答えも見つけ出せない不甲斐なさに。

いや、それ以前にどうしてオレ達が別れたことを知っているんだ、楓が話したのか？ 下手に隠しても仕方がない、嘘を吐いても見透かされそうだしな。

「恥ずかしながらその通りだよ……」

「情けないのね」

「バツサリだ！ 遠慮がまるでない。そんな風に言われては二の句が継げません！」

打ちのめされていることなど知るはずもなく、粉雪は熱を感じさせない平坦な口調で言葉を続ける。

「それにしても、やはり困った問題ね」

いつも迷いのない粉雪の口から出てくるには、違和感を覚える言葉だ。

「どうして粉雪が困るんだよ？」

「前にも言ったでしょう、駆は私の観察対象なのだと。エンゲージシステムは実に興味深いわお互いを思う気持ちで限界以上の力をドレスに与えてくれる。その観察を続けるためにも、駆にはつがいが必要なのよ」

「つがいつて……」

「ただど納得だ。やはり粉雪にとって、オレは興味をそそる観察対象ということか。」

「実に欲求に忠実だ……そこには同情や哀れみがない。」

むしろ、清々しくて気持ちいい。

「つがいがいなければ観察も行えない、やはりここはあのプランを進めるのが一番のようね」

「プランってなにさ？」

「あまりいい予感はないが、粉雪の言葉を待つ。」

「私と付き合いなさい」

「……はい？」



VA文庫

## だってメープルは甘すぎる!2

～恋の雪解け、嵐の訪れ～

2012年 3月23日 初版第1刷 発行

■著者 宮村優  
 ■イラスト 柊ましろ  
 ■メカデザイン 満月〇  
 ■製作 株式会社パラダイム

発行人：馬場隆博  
 発行元：株式会社ビジュアルアーツ  
 〒531-0073  
 大阪府大阪市北区本庄西2-12-16  
 VA第一ビル  
 TEL 06-6377-3388

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをするのは、かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えます。

定価はカバーに表示してあります。

©YUU MIYAMURA ©MASHIRO HIIRAGI

Printed in Japan 2012

VA018